

# 保育者養成における音楽と指導についての一考察

土 田 定 克

Music Education for Nursery School Teachers

Sadakatsu Tsuchida

「音楽家養成のための音楽教育」とは目的を異とする「保育者養成のための音楽教育」とは、どのようなものなのか。音楽の原点を省みながら日本における保育音楽のあり方の可能性について考える。実際に行われている授業や試験を振り返りつつ、今後改善されるべき重要課題などを項目ごとに分けて論説する。人生の花としての音楽を、美しき歌、詩情というものを、これからの子どもたちの心にどのように伝えていくか、その理論と実践例を筆者の音楽・保育経験と、この分野における先人の知恵を交えて論ずる。

キーワード 保育、音楽、生きる力、日本文化、母性

## はじめに

現在、保育者の需要が増すと共に、養成校における音楽教育は重要な任務を帯びるようになってきた。養成校における音楽教育の内容については学会などでも多くの教師陣が研究成果を発表し、時代に即したより良い方法が編み出されている。その中でも特に「音楽家育成のための音楽教育」とは目的を異とする、まさに「保育者養成のための音楽教育」とは如何にあるべきか、という点に最近では論議の焦点が当てられているようである<sup>(註1)</sup>。

本稿ではまず音楽の持つ特性について見直した上で、保育者養成のための音楽教育は今後どのように開花できる可能性を持っているかを検討したい。また、技術的な側面のみに留まるのではなく、深い精神性をも追求できる媒体としての音楽教育を再考してみたい。

## I 音楽の持つ特性

### 1) 子守唄の力

「ねーんねーん、ころーりーよ・・・」

母親が子守唄を口ずさむ。何をしても止まない子どもの泣き声が静まる。赤ん坊は母親の声から何を感じ取ったのか。しばらくすると目の周りに涙を溜めたまま、別人の如くすやすやと眠っていく。母親はどんな気持ちで歌ったのだろうか。愛情を込めて、わが子への祈りを込めて歌ったのではないだろうか。そしてその母親と一心同体である子どもは、母の持つ全ての温もりを感じ安心しきっているのではないだろうか。そこには驚くべき子守唄の力、母の懐というものがある。

育児に様々な方針があるように、保育園、幼稚園の方針も園によって様々である。核家族が進む中、諸事情を抱えながら保育園や幼稚園に通う乳幼児が増えている。彼らは集団生活の中で多くのことを学ぶわけだが、どの子どもも皆親の愛情を欲しがることに変わりはない。まだ飛べ

ないつばめが口を大きく開けて親鳥にエサを要求するように、預けられた子ども達は保育者に様々なことを要求する。いつか自由に空を飛び回るつばめになれる様に、皆で力を合わせて手助けをし、少子化する今の世で少しでも多くの子ども達が一緒になって、まるで兄弟姉妹が沢山溢れる大家族のように、明るく活発に賑わってくれたらと思うのは筆者だけではないだろう。

保育所では、母親代わりとなる保育士が授乳、おむつ交換、子守唄、遊び、散歩、お絵かきなど、あらゆる角度から子どもたちに働きかける機会を持っている。その全てに熟考と心配りとが求められるが、何よりも求められるのは子どもに対する深い理解である。そして、幼稚園も含めて保育現場で用いられる音楽の役割の大きさを我々は知らなければならない。実に朝の集まりから昼食の時、遊戯の時間や帰りの会など、毎日の大事な時にまるで全体をまとめるかのように音楽が使われているが、色々な行事でも雰囲気豊かに飾りつける役割を担っているのが音楽である。

## 2) 生きる喜びと共同体験

親が子と共にいて、今、共に生きる喜びを感じられること、それこそが家庭内平和の基本ではないだろうか。生きることの喜びは、尊い命の交わりの中にこそある訳だから。特に戦時中など、苦しい状況下においては、皆が生きることに必死で協力し合って生きていた。今日一日を生き抜いた時の喜びはひとしおであったに違いない。子は親の背中を見て育ち、たとえ困難な環境の中でも強い精神を学ぶ。平和な日々忘れがちな、今、生きるということそのものへの感動と感謝。言葉が無くても伝わる気持ちというもの、つまり以心伝心と言う言葉があるが、音楽も音楽が響く以前から、その背中から、その人の心が伝わってくるものである。その背中から伝わってゆく精神を、磨き学んでいかなければならないと思うのである。

元来、音楽は人と人をつなぐもの、一体感をもたらし人々の団結力を高めるものである。それは音楽に限らず文化全般の目指すところであるが、音楽には独特の力があると思われる。音楽を聴く時、私達は同じ時空に共に生きる。私はこの体験を共同体験と名付ける。そしてその共同体験は、味わった人の心にずっと残る。昔あの時あの場所で聴いた音楽を何十年後に耳にするとき、私たちの心は、その時と場へ吸い込まれるように帰ってしまう。この力は、時空を超えた日常では味わえないもう一つの世界の表れである。実はあらゆる感動はここから生まれ、感動と共に忘れていたことを思い出す。生きていく上で一番大事な、日頃の生活では忘れがちなものを。皮膚の色こそ異なっても、私達はみな同じ感動を味わう。なぜなら私たちは似たような心を持って生まれてくるからである。

したがって、特に子どもの頃に覚えた歌は、その人の人生にとって深い意味を持っている。しばしば一生涯に渡って心の支えとなることもある。子どもの頃は歌詞を間違えたり、意味も分からずに歌ったりするものである。しかし大人になった時、その正しい歌詞や意味の素晴らしさに気付いて驚く。明るい調子で歌われる「しゃぼん玉」の歌などは、我が子を持ったときに初めて分かるその痛みがある。「風、風、吹くな・・・」の部分が辛辣な心からの叫びだなどと、子どものときには分からない。しかし子どもたちが分からずに喜んで歌う中にこそ、この歌の深みがあるのではないだろうか。

子どもの頃、親に歌ってもらった歌を今度は自分の子どもに歌う。その時の感動を私達はどう言い表すことができるだろう。歌われた側が歌う側に回り、受ける側であった者が与える側

に回る。私にとってひとつの時代が過ぎ去り、新しい時代が始まったことをはっきりと自覚する時なのである。子どもと一体となる上で、よく「子どもの視線に立つ」といわれるが、自分自身の子供時代を思い出し、子供心に一瞬で帰ることのできる歌の力がここにもあるのである。

よく保育科一年目の学生が自分の最も好きな曲として、卒園時にみんなで歌った「おもいでアルバム」を最初に持ってくる。人生の区切り目は深い神秘を持ち、人の心は日頃より鋭敏に感じやすくなっているようである。初めて経験した幼稚園という社会から卒園して旅立つ時、子どもながらに一つの時代が去ったことを理解するのである。「おもいでアルバム」を歌いながら、一年中の出来事を思い出し、もう戻ることはできないという現実を確認しつつ、「いつになっても、忘れない」と誓いながら、思い出の場所と決別するのである。その後の人生で色々な波にもまれてきた彼らが、大学で保育科に入り保育の勉強を始める時、子どもの頃に一番感動した歌を歌う。そして無垢だった子どもの頃を思い出し、子どもの気持ちを思い出し、子どもたちに近寄る一步を踏み出すのである。卒園時にあの歌を歌って涙を流す子どもたちがいる。園歌も「おもいでアルバム」も、涙無しには歌えなかった日、そういう人生で最も大事な変わり目の「時」を、永遠に刻み込むことが出来るのも、音楽の持っている共体験の力である。

### 3) 「時」の流れの中で

日本の文化で「一期一会」という感覚があるが、音楽においてもこの一期一会の感覚は非常に大切である。音楽に関われば関わるほど、この感覚の大切さに気付かされる。保育現場で親や保育者が子どもたちと共に歌うとき、どのように歌うべきなのか。それは、やはり心から楽しんで歌うということに尽きるだろう。心から楽しんで歌うことは案外難しい。「楽しい」という感情の土台として、「私は今、ここで、あなた達と一緒にいて嬉しい」という肯定的な喜びが求められるからである。「今」という時を共体験し、真にそれを楽しむためには、この深い喜びの感情が各人の内に求められると私は考える。何故なら子ども達こそ、口先の言葉よりも、伝わってくる内面からのエネルギーをそのままに受け止めているからだ。

そのためには、温かい心と「時」を見つめる感性を養うことが必要ではないだろうか。限られた「時」の中に流れる人生を如何に生きていくかを考える時、移り行く「時」という逆らえない波を感じ、「時」の足音を腹の底まで聞き届けることが肝要である。それが観えなければ、一期一会の感覚はありえない。「時」の移り行きを感じる事が出来れば、その時、心の中に灯を見つけることができる。全てのものは、限りがあるからこそ価値があるのである。一度きりの戻らない人生をあるがままに受け入れた時、一瞬一瞬の「時」を大切に生きるようになる。

音楽は時間芸術であるが故に、その初歩の段階において、目で見て触って確認のできる他の空間芸術と比べて、全く掴み所がないという困難さがある。しかし純に時間芸術である音楽は、上記の「時」の感性を養うために絶大な効果を持っている。音楽が響きそして消えたあと、心に残るあの新鮮な感覚。まるで生まれ変わったかのように全てが違って見えたりする。許せなかったものが許せたり、苦しかったことが苦痛に感じなくなったりする。地上にない美と調和を奏でる音楽は、決まってマイナスのエネルギーに対してプラスに働きかけ、心の中を変容せしめてしまうのである。これを音楽の浄化作用、つまりカタルシス (καταρσις) という。

この精神的な浄化作用を持つ音楽の力は、効果的に保育現場でも使われる必要があるだろう。

#### 4) 自然体

そして、音楽は楽しむもの、喜びあるものである。

風鈴の音色、川のせせらぎや鳥の声、虫の声。これらも人皆が愛する音楽である。静けさの中で聞こえてくる、自然に存在する音楽、それらを子どもたちに感じてもらいたい。子どもが自然の豊かな環境の中で育つことが求められるのは言うまでもない。もし都会育ちの子どもならば、せめて休暇期間中に自然に触れる機会を与えられたらと思う。夏の自然界のその音楽的に賑やかなこと！暑い陽射しにもめげずに、蛙、鈴虫、蝉、鳥達が元気よく合唱しているさまは、生命の力動を生々しく感じられる絶好の機会ではないだろうか。全て人の創った音楽の原点は、自然界に存する音の模倣に始まっているからである。満ち干く波、そよぐ風、変わりゆく季節の美しさ、それらをまず肌で感じられなければ、歌は自然に湧き出ではこない。実に歌は風のようなもの、波のようなもの。思いのままに吹き、思いのままに去る。考えて、理屈を捏ねてできるものではない。自然の中でこそ人は安らぎ、心身の健康を取り戻して明日を生きる力を得る。人間が良い意味でリラックスした時に受け取れる創造力という偉大な力が自然の中に潜んでいるのである。多くの芸術家もまた、上からのインスピレーションを得るために、人里を離れて大自然の中に還った。人が自然と一体となる時、その人は自分という「個」の殻を破り、比べ物にならない位大きな規模と一つになることを感じる。その時、日頃とは異なる呼吸をしていて、まるでやっと帰ってきたところへ帰ってきたような気さえる。その人の姿は、言うなれば「自然体」、そのままの在りのままの姿。自然の中から生まれてくる落ち着いた喜び、平安、声、なぜそうなのかは永遠に理解できない自然界にある法則の数々、その偉大な神秘を容易に理解し、本当の意味で「自然体」でいられるのは、もしかしたら子ども達だけかもしれない。

子どもは大人よりはるかに敏感で、頭の中に余計な知識がないだけにいとも簡単に物事を理解してしまう。大事なものは、無意識の中で何かははっきり整然とすることなのである。天上の調和を自然の中に見て、知らず知らずのうちに心の弦を調弦するのである。音楽のハーモニー（和声＝調和）にもまた、自然の美しさがそのまま映されている。音同士が敵対しては、ハモることはできない。譲り合わなければ、大事なものを立てて謙譲する部分がなければ、美しく調和しない。だからこそ美しい響きの向こうに天国が見える。平和の国が見える。そこに私たちの日々あるべき姿が映し出されていると言っても過言ではない。

#### 5) 音楽を学ぶ上での留意点・学生の様子

音楽を学ぶ上で気をつけなければならないのが、しばしば教育を急ぐあまり音楽を強制的に用いてしまうことだ。実際、音楽に惹かれる子とそうでない子がいる。十人十色だから当然である。ただ音楽が苦手という子はいても、音楽は嫌いという子は稀有である。もし嫌いになってしまったとしたら、それはもともと嫌いなのではなく、ある時自分が苦手な音楽で恥を搔いたり卑しめられたりした経験が、以後その子に音楽に対して拒否反応を起こすことを教えるのである。小さな時から音楽が、子どもたちの傍に自然な形で存在できたら良いと思う。全てが完成された大人になる前に、心身ともに成長過程で柔軟な吸収力を持った子供時代にこそ、良い音楽が自然な形で同伴できれば、彼らにとって益あることは言うまでもない。

一方、保育士を目指す学生達の現在の様子は如何であろう。重なる実習の合間を縫って行われる授業、試験など、非常に限られた時間内に膨大なカリキュラムが組み入れ、十分に消化する間もなく必死に勉強している感じである。そのような中でも、目には見えない自分の心を省察する時間を持つ大切さを考えてみたい。

現在の保育科の学生たちは入学までにピアノには全く触れてこなかった学生、習っていたが止めてしまった学生、深く携わってきた学生、など様々である。そんな彼らが保育園や幼稚園等で子どもたちの大好きな歌の時間に、やさしい気持ちが子供たちに伝わるような音楽の時間(指導案)を作れるようになるだろうか。私は授業でも色々な工夫を試してみた。

子どもの目から見える物の大きさ、色合い、音量は、大人目からとはどの位、どのように違う感じ方をするものか。また移り行く四季の感覚、私たちが囲む大自然など、美しいものへ感動し共感できる心をあらゆる角度から養う為に、造形などのモチーフとの関連性を引用しつつ、感性を研ぎ澄ます訓練をしながら学んでもらった。

一人一人の学生に幼稚園の「先生」役を実際に演じてもらおうと、他の園児役の学生達が起こす予期せぬ反応に驚き、どのように園児とお話しをするか、学生自身が自ら発見していく姿は何よりも輝いていた。日ごろ目に留めなかった天気や子どもの好きなキャラクターなどと話題を繋げて、まるで親子が散歩をしながら見つけていくたんぼぼやバッタのように、次々と予期せぬ展開が広がる中、微笑ましく暖かい空間が出来上がった。

生きた保育を自ら見つけていってほしいという願いから、音楽的素質に富む学生にもあまり富まない学生にも、音楽のあらゆる規則から離れて彼ら自身がまず子どもの心を持ち、皆が一つになって楽しみながら学べる様に、まず音楽の楽しさ、素晴らしさを心から感じてもらった。授業を通して私の感じたことは、生まれながらの保育者が何人もいるということであった。良い母親にもなれることであろう。非常に感心できる学生も多く、大いに期待される場所である。

## Ⅱ 指導上の具体例

次に、具体的に曲目を例に挙げながら語ってみたい。

### 1) 「メリーさんのひつじ」

単純かつ弾むリズムに満ちた子どもたちの好きな短い曲である。右手メロディーの動きも大きくなく、左手はトニックとドミナントだけの伴奏で弾けるので最初の授業で取り上げるのにふさわしい。温かなひつじのイメージが、明るい調子で歌われる曲である。

この曲にも先述した生きることの「楽しさ」が溢れている。何か特別なことが起こるわけではなく、ただ単に子どもがひつじと共にいて嬉しい、だから楽しいという気持ちである。動物や植物を心あるものとして大事に思う気持ちは、子どもときから育まれるのが望ましく、こういう単純な曲をただみんなで歌ってみるだけで、ひつじに対する愛らしい気持ちが友達との連帯感を伴って湧いてくる。ここにある音楽の力は見逃せない。

### 2) 「春の小川」

全曲はほぼ四分音符のみで歌われるこの曲では、まず譜面上の音符を鉛筆でなぞりつつ、五線



譜における音の高低の位置感覚を感じてもらった。比較的易しいコードによる和声付けも可能なこの曲で、皆で一緒に歌いながら新学期を迎えた春の喜びを実感し、人生の春である各々の子供時代に感じたときめきを思い出してもらうように促した。また、さらに掘り下げてこの歌の詩の意味を考えてみると、まさに春の小川とは母ないしは保育者の心なのである。「岸のすみれやれんげの花」とは言うまでもなく色とりどりの個性を持った子どもたちで、「姿やさしく 色うつくしく 咲けよ咲けよ」とささやいているのは母であり、保育者の願いなのである。いつの世においても、やさしい心を持って子どもたちの成長を見守る姿は美しい。私たちの人生はまさに川の如く、始めは細く速く、次第に深くゆっくりと流れて大海に消えてゆく。しかし、その気持ちがこの川のように自らの全てをもって周囲の者を潤す時、私達の成すべきことが成就するのではないだろうか。

### 3) 「こいのぼり」

新緑の春、ゴールデンウィークの頃に訪れる端午の節句。男の子のいる家庭では家の中に鎧兜、庭にはこいのぼりを飾って春の風情を楽しむことは、今や全国一般的な慣わしである。爽やかに晴れた春の空に威風堂々と泳ぐこいのぼりの姿は、色合いや風向きに調和が取れており、見る者の目を喜ばしている。

ちょうどこの時期、造形の授業でもストローなど身近な材料を使っての工作課題に「こいのぼり」が用いられている。学生が作って展示されたこいのぼりを見てみると、彼らの感性がよく滲み出ている。音楽は苦手だけれど、造形では光っている学生もいる。それぞれの個性が輝いていてこれが実に面白い。同じ時期に音楽の授業でもこいのぼりを取り上げた。学生達の興味と理解、また季節感への感性を磨く上で、とても良い相互作用をもたらすと思われるからである。

### 4) 「うみ」

大人でも見ていて大きく、広く無限だと思ふ海を、子どもが見たらどのように映るだろうか。大きく押し寄せてくる波を、「すごいなー」と思う子もいれば、「こわいなー」、「あそこはなんだろう?」、「何がいるんだろう?」と、海の偉大さにびっくりする子ども達も沢山いるだろう。夏休みに近隣の海に行くことは、よく冷えたスイカや風鈴の音色と共に、今や日本の夏の風情、人生の彩りである。

その海の広さと深さを、テンポをゆっくりして雄大さを感じたり、強弱を使って波の感じをどう表現するかなどの技術的なことは勿論だが、こういう曲では小さなことを気にせず、何よりのびのびと歌うことが肝心である。

### 5) 「どんぐりころころ」

日本の国土といえば、海と山。またその山間を縫うは清流の川。そして田んぼ。田んぼの中では稲が沢山の実をつける。そこで秋に取れる米は日本人の心である。

「うみ」に行った後には山に登ろうと、この曲を取り上げてみる。自然界の相互のつながりと調和の持つ美しさを、音楽を通して感じてもらいたいからである。この曲ではどんぐりがドジョウと話して遊ぶのだが、どんなに楽しい遊びでもやはりお家が恋しくなってしまうのである。人、動物、自然、全てのものに表情、気持ちがあるのだということを感じられる曲である。

## 6) 「おおきなうた」

これは詩の意味が大らかで素晴らしい。優れた芸術は、限られた時空内における表現で、その比喩するところを確かに感じ取れば、時間も空間もぐっと広がるのが出来る神秘的なものだ。大らかな歌詞に雄大な旋律が添えられて感動的に響くこの曲では、大自然の壮大なスケールに自分の心を重ねて謳う。実に私たちの心は無限であることが分かる。

この歌はカノン形式で歌うことが出来るので、2つのグループに分かれて歌ってもらった。また、クライマックスの部分は二声になるので、一声ずつ練習してみた。最後に合わせて二声が見事に調和した時、学生達の喜びは実に大きかった。この曲は技術的に難しい為、技術的にも成長した頃に取り上げるのがふさわしい。

## 7) 「ふるさと」

この詩情を言葉で如何に表せよう。感動無しにこの曲を歌うことは出来ない。年齢を重ねる程にこの曲の真実性が見えてくる。3番で「いつの日にか帰らん」と歌っているが、実際には故郷に帰ることはできないのが人生なのである。たとえ一生涯生まれ育った土地で生活したとしても、あの昔のふるさとはもう帰ってはこないのである。人生は行きっきり、結婚や仕事の関係で転居を余儀なくされることもあろう。しかし、「ふるさとは 遠きにありて 想うもの」と言うように、温かく故郷を、母国日本を、実の母のようにいつも覚えていてほしいものである。そしていつの日にか、皆が子ども達の故郷になるのだということ、つまり、故郷の思い出とは母の思い出なので、母の代理である保育者は、子ども達に温かい思い出を作れる保育を志してほしいのである。

実際、私達も子どもの頃を振り返るとき、そこに両親、幼稚園の先生、近所の方々等、私たちを見守ってくれていた周囲の存在を同時に思い出すものである。幼い頃に聖なる思い出を持たた子どもは幸いである。それは時として、その後の人生を左右するほどの力を持っている。如何なる困難に出会っても、子ども時代を思い出すと、自分の人生の原点がそこにあるような気がして自分自身に返ることができたりもする。恐らく東北出身の学生達には、この「山は青き ふるさと」も、「水は清き ふるさと」も幸いなことに近いものであったろう。青い山と清い水は、換言すれば美しい日本国土の象徴である。堂々たる山は父性を、柔らかな清水は母性を謳っているのかもしれない。これは私たちの心がどうあるべきかを黙ったまま論じてくれている日本の自然である。

海外生活の長かったある知人が、何十年ぶりに帰国して久々に満開の桜を見たとき、それは単純に美しいなどというものではなかったという。ただ感動して、その見事な姿の前に立ち尽くして、ひたすら立派だ、偉大だ、と泣きたいくらい心が震えたものだったという。故郷とはそのようなものではないだろうか。

最後に、指輪物語の中に故郷についての名句がある。「我がふるさは 我が行く道の 前にあり」。苦しい状況の中で、主人公は進むべき前方を見据えてこの台詞をつぶやくのだが、何と喜ばしく、何と力強い言葉であろうか。故郷は過去に消えたものではなく、私たちが進む先の未来にこそ待っているのだと確信しているからである。流れる川にとってやがて辿り着く海のような、故郷の温かさ、偉大さと、そこから人が受ける慰めについて考えさせられる言葉である。

### Ⅲ 指導上の技術的な側面と諸問題

#### 1) リズム・ソルフェージュ・音程

譜面を読み始める上で第一の関門となるのはリズム（時間的空間）の理解である。したがって徹底してリズムの練習を重ねることが不可欠である。特に付点リズムの理解は難しく、まず四分音符を母に、付点を子に喩えて、○音符+2分の1の原理を「母が子を抱いた状態」と同一視するなど、学生の専門とする領域の感覚を取り入れてみた。

また、音の高さの聴き分けの困難な学生がいる事実を目を留め、簡単にソルフェージュ的な要素も授業に取り入れた。集団で行うには困難な訓練なので、音程や和音の書き取りをしてもらい、赤ペンによる修正を施した。音楽の勉強は日々の努力の積み重ねのため、間違ったところを如何に間違えたか、家における復習で確認してくれると吸収も早いのだが、忙しさのためもあり実行できる学生は多くはない。その場合は、皆に多く共通した間違いを授業内で紹介し確認してもらう。

もちろん忠実に宿題をこなしてくる学生は着実に伸びている。それは賞賛に値する。難しいのは、それができなかった学生である。しかし、強制はせず、何よりも音楽と楽しく関わる気持ち持ちは大事としてもらった。

#### 2) 和音の種類・カデンツ

音程の関門の次に和音の関門が待っている。長三和音と短三和音、明るい暗いかの響きの区別を聴き分けられない学生が僅かながらいるのである。そういう学生には色々な角度から何度も説明を試みた。半年という短い期間で達成することは厳しいが、旋律に比べ、和音の聴き取りは概して理解されにくいという事実が音楽教育の分野でも確認されているため、急がず、子どもの歌でよく使われる和音に絞って訓練した。実際、童謡には殆ど難しい和音は存在しない。度数、機能、それから手の形（ハンドフォーム）と、視聴覚の様々な角度から、和音の展開形を含めた一瞬困難に感じるドミソ・ドファラ・シレソ・（シファソ）・ドミソによる左手カデンツ進行の法則を徹底して学ぶよう促した。和声については、究極的には主要和音と呼ばれる3つの和音、その中でも最も使用頻度が高いのは僅か2つの和音、俗称お辞儀の和音（ $V_7 - I$ ）だけである。そのためどんなに音楽が不得手な学生にも基本の基本だけは確実に理解できたのではないかと思う。

#### 3) コードネーム・和音の展開形

コードネームもやはり困難の様である。しかし、現実的には伴奏の書いてある譜面の方が多いので、コードは基礎が分かれば後は应用到過ぎないため、あまり緊張することのないように促す。

コードの学びはドリルを使って問題を解いてもらう。よく使うセブンスコード以外は、主にメジャーコードとマイナーコードに絞って指導するが、特に「B」と「B $\flat$ 」のコードが分かりにくいようである。聴覚で本能的に完全5度を捕らえられる学生と、それが無理な学生がいる。従って黒鍵と白鍵の関係や、弾かない鍵盤はいくつつずつ存在するか等、数学的・視覚的な方向からの理解を促した。

和音の展開形は根音、第3音、第5音を色別で表記し、それがどのように変化しながら組み



立てられるかを視覚的に訴える。展開形による響きの微妙な変化は、聴覚では感じ取れない学生も多かったが、理論は比較的理解できたようだった。これらの音楽に存在する微妙な響きの世界を無理なく聴き取れるためには、どうしても子どもの頃からの訓練が必要である。幼児期に音楽にあまり触れてこなかった学生には、無理難題を押し付けても逆効果なので気をつける。

#### 4) 日本の音階

また、日本の音階にも触れてみる。五音音階（よな抜き）の響きを感じてもらい、「さくらさくら」を弾けるように練習する。用いる楽器が洋琴（ピアノやオルガン）であるとは言え、日本人が日本の曲を奏で歌う姿は実に美しい。始まりと終わりがはっきりしない日本の音楽、これは日本人の感性そのものである。

あるとき上空で機内の窓から眺めたドイツの田畑は、しっかり碁盤のように整然とされており驚いたことを覚えている。西洋の文化は、建物にせよ田畑にせよ、人間の頭脳が先行しており非常に幾何学的である。隅々まで計算された美的感覚は、自然に既存する形を重んじる東洋のそれとは趣が異なる。日本の文化では、人の頭脳が先行しない。むしろ自然の姿を少しでも損なわないように繊細な工夫が施されている。素材の味を大切にするのも和食の特徴である。山間を流れる川の形に沿って、田畑も作られている。わび・さびの文化、間の文化。比較的、陰律の多い日本の歌には、どこか遠くを想う美しさがある。

先述の「ふるさと」のように、遠くを想う気持ちはとても大切なことではないだろうか。わび・さびとは、移り行く「時」を見つめる際に感じる人間の無力さと、その謙虚な感覚を土台として自分よりも果てしなく遠くにあるものへの変わらぬ希求心を指すのではないだろうか。一見無力そうに見えるが、実は壮大な規模で、大きく全体像を見渡しているのである。それはどこことなく望郷の念にも似ているかもしれない。

今や世界中で知られる日本の歌といえば、第一に「さくら」である。日本の桜の美しさは格別である。あの淡い薄桃色は外国の地では見つけにくい。「さくら」には古い歌詞と新しい歌詞があるが、その差異にも現代までの日本における世界観の変貌が良く表れている。古い歌詞の方が、より花見に行こうとする心の動きが描かれており面白いと筆者は思う。何故なら遠くを想う気持ちがより強く表れているからである。

#### 5) 日本における保育音楽

2007年5月に行われた日本保育学会で、ある教師が日本における保育音楽のあり方について力説していた。特に次世代を育てる要となる保育現場では、国内における保育音楽のあり方の是非は重大な責任があるため、その先生は今まで多くの辛酸を舐められた上で、ピアノを全く使用しないで日本独自の音楽教育を行う試みについて話されていた。日本の音楽文化が西洋の模倣一辺倒な現実、疑問を持たずにいられない音楽専門家は数多い。しかし、今我々の近くにあるものの全てを否定してしまうのではなく、今あるものも積極的に活かしながら、同時にまた、日本にしか存在しない音楽文化も決して忘れないように伝えていくことも大事なことでないだろうか。

周知のように現代のピアノは平均律で、最も機械的、人工的に調律された楽器である。純正律の如く無垢に完全には調和しない。また、いくつかの国の音階を正しく奏でることも、それ

らを現代の五線譜で表すことも不可能である。しかし、今問題となっている音楽の使われる現場は、保育の世界であり、コンサート会場における音楽のあり方とは異なる。また、ピアノは便宜上最も用途の幅の広い楽器でもある。その世界中における普及度の多さから言っても、ピアノの持っているあらゆる特性は上記の欠点を遥かに凌駕している。子どもたちに音楽に触れる機会を設ける時、それが歌に始まるのが最善なことは言うまでもない。歌は体という楽器から響くからである。体は天から与えられた楽器、最も美しく、最も微妙なニュアンスを全て表現できる媒体だからである。しかし、それに伴奏を加えては如何であろう。ピアノは伴奏にも優れた楽器である。ばらばらになった子どもたちをまとめるためにも、一役演じることができる。このピアノという楽器、メロディー演奏と伴奏を一人で成就できる楽器、やはり自由に操れるに越したことはないのかもしれない。

#### 6) 幼児のためのさんびか

尚綱学院大学はキリスト教主義の大学のため、私は美しい讃美歌を用いて、音楽の美しさ、楽しさに感謝しつつ授業を締めくくっている。特に幼児のためのさんびか集から抜粋した「ちいさいおてて」は多くの学生の心に留まったようだった。

尚綱学院の先輩方も皆学ばれた伝統的な幼児讃美歌で、まず讃美するとはどういうことかを話し合う。これは宗教的な内容で受け入れ方が問われる。話し合いと言っても、実際殆どの学生は讃美について考えたことはない。そこで、讃美とは、まず与えられたことに対して「ありがとう」を感じる気持ち、そのありがとうの上に、更に与えられて更に与えられて、こちらは「ありがとう」の気持ちが益々募って、ついに「あなたはなんて素晴らしいんだ！」と感嘆することが讃美なのだとして解説を試みる。「あー、そうなんだ」と納得してくれた学生もいる。「かみさま」など形而上の存在、人より上にある存在は音階の中でも高い音域を用いるという伝統的な手法、同時に形而下は低い音域を用いることなど、2つのクヴァルトーンが音階に存在する意味についてなども語った。歌詞の中にも「ちいさいおてて」とあるが、学生の中でも赤ん坊の手を見たことのある人は少ない。子どもの手もかわいいが、赤ん坊の手の愛らしさは特別である。

#### 7) まとめ

以上の具体例でよく分かるように、音楽の基礎技術的な側面については音楽家育成を目的とするのではなく、保育者に必要な音楽の基礎知識と技能を持つことに目的を絞り、頭だけではなく五感を通して学んでもらった。また音楽家とは違い、保育者には保育者であるからこそその要求がある。例えば「楽しく歌う」ことなどである。これをできるようにするための訓練は、音楽家に求められるそれよりも意外と難しいものなのである。ここでは仏頂面は通用しない。自信やプライド、上手であることが絶対ではない。お母さんのように優しい包容力のある保育者が求められる。保育における音楽は、優しさを表現するための手段であって、技を達成すべき目的そのものではない。この点だけは見失わないでほしいものである。目指すべき保育者の全体像が見えなくならぬよう、単調になりがちな技術的な訓練に際しても、常日頃から子どもの身になって感じる心を失わないように、理論と実践を必ず結び付けて体得してもらいたいのである。

#### IV 実技レッスンの展望

##### 1) 重要課題な読譜と暗譜

保育者に何よりも求められる技能は、ピアノ演奏そのものよりも、むしろ「弾き歌い」という技能である。これは慣れるまでかなりの時間を要する。何せ大人に限ってなかなか元気いっばい声が出ないものなのである。遠くに届く声でとか、太平洋にまで届く声でとかイメージを最大限に引き出し、あらゆる角度から発声の活性化に努めた。約1ヶ月後には良い反応が表れ始めた。恥ずかしがり屋の性格は保育現場ではあまり歓迎されないし、声が出なければ子どもたちはついてこられない。

またピアノ伴奏が付くと、つい譜面に嘸り付いて自分の歌にまでは注意が及ばないというパターンが非常に多く見受けられた。その解決策の一つとして、黒板に大きく「<」のマークを描き、左側には極小の文字で「ピアノ伴奏」、右側には非常に大きな文字で「うた」と明記するなど、歌と伴奏のバランスを視覚に訴える形で表現する。五感における人の情報受容力のバランスは、視覚が第一位で90%と言われるだけの事はある。分かりにくい聴覚の世界のことも視覚で理解できる形に直して表すと、効果は顕著である。

保育科の学生においては、現場に行った時に役に立つ子どもの歌を在学中にどれだけ自分のものにできるかが非常に大事な課題ではないだろうか。自分のものにする、つまり自分の血肉にするということは、勿論、暗譜していつでも弾き歌うことが出来るようにすることである。そのため子どもの歌を少しでも多く、歌詞も含めて暗譜で弾き歌いできる訓練をすることがやがて保育者になる学生にとって重要課題だと考える。

試験時に見られた風景で、ピアノ曲は暗譜だが、子どもの歌は譜面を見て弾く学生が多かった。これでは現場に行ったときに困ってしまう。何故なら現場では譜面を広げる時間的余裕がないことも考えられるし、たとえその余裕があったとしても、暗譜で弾けるのであれば子ども達の方に注意を向けられるからである。子どもの曲を暗譜で弾くこと、そして子ども達をリードするような形で歌えるようにする訓練が保育者を目指す学生たちには不可欠である。

従って実技的な方面では、子どもの歌の暗譜による弾き歌いを可能にすることがまず底辺だと考えられる。譜面を読むのが不得手な人にとって暗譜は得意な場合もあるのだから、この問題は何よりも先決すべき課題である。私は個人的には、読譜が苦手な学生には、片仮名でドレミを書き込んでも構わないと考えている。但し必ず鉛筆で書いて、覚えたら消しゴムで消したほうが良い。大学に入る年齢になってから全く新しいことを学ぶことがそもそも難しいことなのだから、あまり事務的な能力を追いかけない方が、音楽的な上達は早いと思われるからである。大事なことは、音にして弾けるようになること。その過程で多少越えられないハードルがある場合は取り去って、まずはゴールする喜びを感じる事が大事ではないだろうか。音楽する楽しみと喜びを感じてしまえば、音楽を勉強する意欲が自然と湧き、新しいことも無意識のうちに頭に入ってくるものである。「好きこそもの上手なれ」というように、音楽に親しみを感ぜられることが第一歩なのである。

以上のように、保育科の学生を養成する場合、音楽の勉強に困難を感じさせられる場合は、時と場合にもよるが、私はその困難を取り去ることを選ぶ。先にも述べたが、五線譜読破が彼らの目的ではないし、譜面を読めることが音楽的な人間性を作ることと直結するわけではない。それは個人的な能力であって、つまり昔、読み書きが出来なかった人達が普通に生活でき

ていたのと同じ現象である。たとえ読み書きが出来なくても、聞いて話せば充分に人とコミュニケーションは取れるのである。保育を専攻する学生にとって大事なものは、音楽を通じて子どもたちとコミュニケーションを取れるようになることであって、決して譜面を正しく読めるようになることではない。実際、譜面を読まずに耳だけで聴いて弾けるようにするメソッドが、ヴァイオリンの世界には存在するのである。私は決してその賛成派ではないけれど、先にも触れたように、保育者養成校は音楽の専門教育が目的の場所ではない。ここで学ぶ学生たちが現場に送られる日は非常に近く、音楽の緻密な学習に多くの時間をかける余裕も力もあまり用意されてはいないのである。ある程度、正攻法ではなくても、音楽の困難さを少しでも多く取り除いて、より多く実地で役立つ力をまずは身に付けてほしいという願いから、私は以上の結論に至った。

## 2) 姿勢について

勿論、より高度な技術が取得可能な学生たちには、曲を暗譜した後に勉強すべきことはまだまだある。それについて以下述べてみよう。

まずは弾き方。ピアノに真っ直ぐに向かって弾く方法は正しい弾き方であるが、保育現場では果たしてそうと言い切れるだろうか。保育現場で音楽を導入する時に求められるのは、何よりも保育者の持っている「気」である。その「気」は子供たちに向かっていなければならない。つまり、正面をピアノに向ける姿勢では子どもたちに背を向ける形になってしまうのである。ここでも暗譜が基礎であることが再確認されるだろう。保育現場では、右のペダルは左足で踏む。右足が子供達の方に向けて上体を支えれば、上半身はピアノではなく子どもたちに向かう。つまりほとんど鍵盤すら見ないで弾けるくらい、歌を自分のものに行っていることが理想なのである。

## 3) 転調法

子どもの歌は至って反復（リピート）が多い。歌詞が2番・3番までであるのは当たり前で、時には5番・6番まで歌詞が発展して同じメロディーが繰り返されることがある。その時にどう弾くか。全部同じように弾くのも基本だが、それだけではいまひとつ面白みに欠けてしまう。そこで最後に繰り返される時に半音高く転調してみても如何であろう。子どもたちに少しでも音楽の楽しさと素晴らしさを伝えるには、やはり繰り返しの中にも意味があり、最後にはその波が高まって調（色彩）にも反映されることが出来たら、子どもたちの受けとる感動もまたひとしおではないだろうか。

このための方法は、転調の際に新しい調の $V_7$ を歌の最後の強拍に入れて、曲頭に戻った時は新しい調で弾く。あとは全部の音に $\sharp$ を付けて練習すれば良い。その際、「ミ」と「シ」は「ファ」と「ド」になり、原調に $b$ があるときはそれらをナチュラルに変えて弾くことなど、留意されるべき点はそれほど多くない。これは絶大な効果をもたらすので、卒業までの間には是非ここまでできるように訓練してほしいと思う。そのような音楽の楽しさや素晴らしさを感じてしまえば、上達は自然と付いてくるものではないだろうか。そのためには教える側が、子どもの曲に真剣に取り組むことが非常に大切な要素となってくるであろう。



#### 4) ピアノ伴奏法

大勢の子どもたちと共に歌うとき、ピアノ伴奏の方法には大きく分けて2つの方法がある。1つはメロディーを右手で弾いて、伴奏は左手で弾く方法。声は右手に合わせて歌えるのでこれがまず基本的なパターンだと言える。子どもたちもこの方法によって、メロディーの輪郭をはっきり覚えられるし、左手伴奏も付いているから響きの全体像も掴める。保育者にとっても弾き歌いがしやすい方法である。

もし、子どもたちが繰り返し歌ううちに自由にメロディーを歌えるようになったら、ピアノ伴奏は一段階上の変奏を試みても面白い。メロディーは子どもたちの声に一任して、両手を使って伴奏を奏する方法である。保育者1人に対して子どもたち20人以上の場合など、元気いっぱい歌う歌声に対して伴奏が聴こえなくなってしまうようにするためには、この方法の方が適している。音楽の全体像としても、このパターンの方が明らかに豊かな響きとなる。

端的に言うと、表現の幅がさらに広がるのだ。メロディーと伴奏、その主従関係のバランスはどんな音楽にも共通する鉄則だが、子どもたちの側からすると、元気に歌う自分たちの声に元気な伴奏が下から支えてくれると非常に歌いやすいものなのである。両手伴奏独特の、広い音域に渡って躍動するリズム感、しかも手とは全く別の動きをする歌を口で歌わなければならないので保育者には非常に高度な技術かもしれない。また、歌声は自由に弾かれる両手伴奏を凌駕するほどしっかりリードして歌わなければ全体のバランスが崩れてしまうので、優れた音感と熟練の技が必要になってくる。しかし、音楽的技量に富む学生にとっては決して至難な技ではないだろう。導入する潮時は見極めなければならないが、これを修得できれば、子どもたちが喜ぶことに間違いはない。

#### 5) 歌唱法

子どもの歌を歌うときは、はっきり明瞭に歌われることが望ましい。

また、「雨ふり」や「かくれんぼ」など、嬉しさを表現する子どもの歌にはしばしば軽快な付点のリズムが多く用いられる。そんな時は譜面通りに歌うのではなく、付点音符はややスタッカート気味に歌ってみると一段と雰囲気が出るものである。歌詞の聞き取りやすさも考慮に入りたい。例えば「おおきいき」など「大きい木」が正しいが、歌い方を注意しないと「大き息」に聞こえてしまう。実際、大事な単語は特に際立たせて発音し、長め或いは短めに強調して発音することによって全く聞こえ方が変わってくるものだから注意したい。

### V まとめ

今回は「保育者養成における音楽と指導」という点に論点を絞って、その理論と実践例、またその都度その結果と考察を列挙してみた。お叱りを受けるべき点もさぞかし多くあることだと思われる。また今回は養成校における教育の域を出なかったが、次回はいっと子どもに近づいた研究が待たれるところである。

人の話しをよく聞いて理解することは、生きていく上で欠かすことのできない大切な要素である。それは日々の生活の上でも、何かを学ぶ上でも至って大切なことである。人の「話をよく聞くこと」は、まず「耳をよく澄ますこと」を体得することに始まるのではないだろうか。

音楽を学ぶことにより、人はこの「耳をよく澄ますこと」を覚える。聴くことの大切さ、時



に難しさ、また聴くということへの能動的な積極性を知らず知らずのうちに身につけることが出来るのである。音楽は単に美しいもの、心地よいものではない。音楽は、人々に調和（平和）への道、美への道を開くのである。

表現としての音楽を学ぶ時に、しばしば起る間違いは、表現することそのものに夢中になってしまうことではないだろうか。子育ても同じだが、あまり躍起になっていないときの方が、かえって伸び伸びした仕事ができたりする。私たちは表現することを学ぶ前に、まずやがて表に現れる、もともと内面にあるべき「状態」というものを学ぶ必要がある。何だか一所懸命に表現しているのに、何が言いたいのかが分からない、ということは得てして未熟な表現によくあることである。あるべき「状態」さえ見つけてしまえばあとは自然と付いてくるのだが、肝心なそれが見つからない。その目に見えぬ深い世界を人は第六感と言ったり、四次元（三次元空間+時間）を超越した五次元と言ったりする。「共存芸術としての保育論」とも言えるこれらのことについては、次稿で述べたいと思う。

人の心は神秘が尽きない。この無限の存在をどう慰められよう。「三つ子の魂、百までも」とあるように、人は生まれた時から千差万別で、多数の学生全員に満遍なく納得の行く教育をすることは不可能に近いではないか。多少の厳しさが功を奏することもあれば、最後まで温かく見守ることに徹した方が奮起して花開く場合もある。学生一人一人に与えられた力量と性格、育ちや環境によって、教える側の指導法も全く異なるものである。

人間の教育は生まれた時から、或いは生まれる前から既に始まっており、特に幼児期の教育が大切であるとは多くの学者の認めるところである。「医者よ、自身を治せ」という言葉があるのなら、「教師よ、自らを論せ」と言っても過言ではなからう。教育者は自分自身を導くことが第一ではないだろうか。その背中を見て学ぶ次世代のためにも、まずは自らを育ててゆく姿勢を忘れずにいる必要がある。

保育者になるための音楽基礎知識と技能を伝える上で、何よりも一番大事としたいことは子どもと接する時の姿勢であり、精神性、心構え、子どもたちをまとめる保育者としての自覚である。それらを持って、温かい背中で子どもたちと関わって行ってほしい。保育者になるとは、母代わりになること、つまり、理想として「母」という偉大な役割があることを忘れないでいたいのである。良き保育者になるとは、良き母になることである。この母という大らかな感覚が各々の基盤にあることが大切ではないだろうか。保育の専門教育を受けたからには、良き保育者になることは勿論、良き母親にも成長して、これからの日本を担う世代を力強く育てて頂きたいと心から願う者である。

最後に、この稿を書くにあたり、適切なお助言と温かいお励ましを惜しまなかった東義也先生に、心からの感謝の気持ちをここに表明し、深く御礼申し上げます。

(註1)

後藤紀子『保育者養成校におけるピアノ指導研究』日本保育学会第60回大会論文集所収、2007年  
福西朋子、山本淳子、三宅啓子『保育者に求められる音楽的専門力量形成について(Ⅳ)－T短大「器楽法」  
授業改善における取り組み－』日本保育学会第60回大会論文集所収、2007年  
三小田美穂子『保育者養成機関における歌唱模擬保育の意義に関する研究』日本保育学会第60回大会論文集所  
収、2007年

参考文献

飯田秀一編『音楽リズム』同文書院、2000年  
井戸和秀編『幼児の音楽的表現とその環境』大学教育出版、1996年  
倉橋惣三『倉橋惣三選集第1～5巻』フレーベル館  
下山田裕彦『子どもの“こころ”をひらく』霞出版社、1999年  
民秋言『保育資料集 教育要領・保育指針の変を中心に』萌文書林、2004年  
Богоявленский В. «Беседы о православном воспитании детей». Свято-Елисаветинский монастырь. 2004  
Медушевский В. «Интонационная форма музыки». М. Композитор, 1993. — 262с.

